

## 生態学的環境としての母親行動に関する研究

戸田 須恵子

北海道教育大学釧路校育心理学教室

## The study of mother's behavior as the ecological environment

Sueko TODA

Department of Educational psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

## 緒言

## 現代社会の中における子どもの問題

我々が住んでいる社会ではいろいろな問題が生じている。問題の一つは自然の生態系に関する問題であり、もう一つはその中で絶えず影響を受け続けている我々人間の生存に関する問題である。人間はより良い生活を求めて多くのものを発明発見してきた。その結果、地球の生態系に変化をもたらした。その危険性が世界的に問題となり、国際会議が昨年日本で開かれたことは誰もが知っている。地球の生態系の変化は我々の生活意識を変え、子どもを育てる環境を変えてきた。高度経済成長は確かに我々人間の生活を物質的に豊かにしてきたが、物質的な生活の豊かさとはうらはらに精神的な豊かさはあまり問題にされてこなかった感がある。教育も日本経済の高度成長に貢献すべき人材を育てる方向で教育されてきたのではなかろうか。従って自然環境に関する教育も、自然との共生というよりも自然を克服するための教育ではなかったろうか。その結果が今日多くの問題を生じさせることになったのであろう。

経済発展は我々の生活環境を変えた。子どもを取り巻く環境の変化も挙げられる。都会では、かつて野原であった場所に高層ビルや住宅が建ち並び、空き地がなくなり子どもの遊ぶ場所がなくなっている。幼児は小さな公園でほぼそと遊んでいる状況であり、小学生や中学生ともなると戸外での遊びよりむしろコンピューターゲームに夢中である。さらには子ども人口の減少がある。1997年の日本の出生率は1.5を割った。これは一世帯の家族構成員の減少を指し、きょうだい数の減少を指す。これらは又、近所に遊び友達が少ないことを意味する。これらの現象は子どもが人とのコミュニケーションを通していろいろなスキルや事柄を経験したり学習する場が少なくなった

ことでもある。生活の豊かさと子ども人口の減少は、親子関係にも影響を及ぼしている。親は子どもの数が少ないため一人の子どもへ関わる時間が多くなり、親の養育態度や行動は過保護現象を生んだ。さらに子どもが学童期に達すると教育ママと言われる母親を生んだ。せめて我が子に高等教育を願うその背後に、子どもに良い社会人にとよりより、より良い会社に入り、物質的に豊かな生活を願う親の心理が働いているのではなかろうか。その手段として子どもの心を理解することなく塾へせき立てる。子どもは親とのコミュニケーションを十分にすることなく学校、塾、稽古事と忙しくただ移動ストレス状態に陥っている。

神戸の少年の殺人事件以来、巷では小中学生の犯罪が目だっている。ナイフを使つての殺人、あるいは脅迫といった凶悪事件である。事件を起こした子どもの動機は、1) 事件を起こせば学校に行かなくてよいから、2) 遊ぶお金がほしかったから、3) 気がむしゃくしゃしていたから、4) 刺すつもりはなかった等々である。しかし、これらの理由はいずれもその年齢相応の精神が十分に発達した子どもの発言とは思われない。幼少時代からの自己概念の発達、あるいは認知能力や情緒の未発達などが起因しているように思われる。誕生時に親に「どのような子どもに育てたいと思いますか」という質問に「思いやりのある子に」と答える母親が大多数である(74.61% 1990年のポーラ文化研究所調査による)。親は果たして思いやりのある子どもに育ててきたのであろうか。子どもは青年期に入ると(現代では小学校高学年から青年期と呼んでいる)、心身に大きな変化が起こる。その為、先進国社会においては青年期は情緒的に非常に不安定な時期と考えられている。そのような時期の彼らの思考や価値観などが社会の変化に伴ってどのように変化しているか参考までに紹介しよう(表1)。表に示してあるように、現代青年の特徴は、

表1 新旧時代の意識と行動

項目	世 代	
	旧世代	新世代
思考	デジタル型 (論理的・意識的)	コラージュ型 (イメージ的・無意識的)
価値	現実原理 (勤勉・節約・几帳面 禁欲・愛他・恥)	快楽原理 (フィーリング・自己中心 カッコよさ・遊び)
支配原理	父性原理 (自立)	母性原理 (甘え・依存)
態度	能 動 性 (現実的・共同的)	受 動 性 (幻想的・主観的)
非 行	現 実 的 (反社会的)	幻 想 的・遊 び 型 (非社会的)

(「青年の心理学」より P. 221)

フィーリングや快楽を求め、行動は受動的とまさに犯罪の動機と一致している。このような青年の特徴は幼少時から形成されてきた結果である。親や教師はこのような青年の意識・行動の変化を十分理解して子どもを教育してきたのだろうか。

#### 環境教育は誰がするのか

大人は子どもに「人に親切にしないさい」、「空き缶はきちんとくず入れに入れなさい」と教えている。一方、大人は歩きながらのタバコ、吸い殻や空き缶は道路へポイと捨てる。車のゴミは走りながら捨てる。まるで自分だけよければ周りはどうでもよいといった行動である。子どもは言葉で教えられる以前に大人の行動を見ながら育っている。教えたことがないのにある時自分と同じ言動をした我が子を思い出してほしい。一時的な言葉だけでは環境に優しい行動は身につかない。実際、学校で環境教育の一貫として日常生活の社会的慣習や道徳について指導したが一年後の結果は、不成功であったという報告もある。学校だけでなく、家庭も協力し、大人が率先し行動して初めて効果が期待できるのではなかろうか。では効果ある環境教育を考えるにあたって子どもを取り巻く環境構造はどのような仕組みになっているのであろうか。

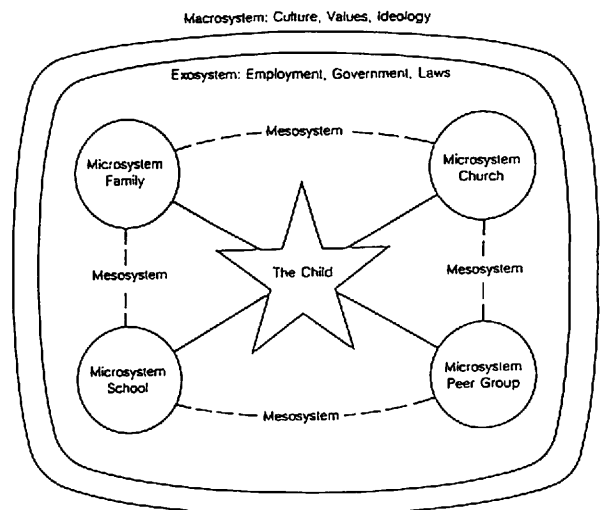
#### 生態学的システム理論における環境とは

環境と子どもの発達とは密接な関係を持つ。子どもが育つ環境は自然と社会あるいは文化である。ブロンフェンブナー(Bronfenbrenner)は、子ども、家族、社会間の複雑な関係を理解するにあたって生態学的システム理論として4つの概念を提唱した(1979)。彼は人間の生態学的な観点から発達の一部として社会を見ている。人は生涯を通じてその社会状況の中で、関係を持ちながら影響されつつ発達していくと考える。子どもを取り巻く自然、社会

そして人間環境は、直接的、間接的に子どもの発達に影響している。社会あるいは文化を含む生態学的環境は4つのシステムからなる。第1はマイクロシステムである。子どもはある状況の下で、子どもを取り巻く社会的環境に置かれ、その中で社会に適応できるスキルを獲得していく。乳幼児期では、その獲得過程で親や兄弟の影響は大きく、学童期に入ると先生や仲間からの影響も大きくなる。第2はメゾシステムである。このシステムは子どもが関わるマイクロシステムの相互間の関係をいう。例えば子どもが所属する家庭と学校とは相互に関係しており、子どもはその関係の中でいろいろな事を経験し学習する。第3はエクソシステムである。エクソシステムは、発達途上にある子どもが直接影響を受けない他の社会のメゾシステムの文脈にある。親の経歴や職業や会社、あるいは学校や家庭に影響する近隣、メディア、交通機関、経済といった文脈が含まれる。しかし、エクソシステムの場合、子どもへの影響は間接的である。第4はマクロシステムである。このシステムは今まで述べた3つのシステムを包含するシステムで、文化、信念といったものであり、その国の文化はそこに生存する人々に影響している。これら4つのシステムはお互いに相互の関係を持ちながら、直接、間接的に子どもの発達に影響を与えている(図1)。

#### 子どもの生態学的環境

乳児にとってのマイクロシステムとして親あるいは家庭は直接乳児に影響している。ボールビイ(Bowlby, 1969)



(Fogel, 「Infancy」1991より)

図1 生態学的システム理論

表2 家族に関する情報

母親の平均年齢	34歳	父親の年齢	36歳
母親の教育年齢	12.6年	父親の教育年数	13.2年
きょうだいの数	一人-54人、二人-113人、三人-43人 四人-9人		
母親の職業	88%が専業主婦		
父親の職業	自営業 6.8% 会社員 67.6% 公務員 19.6%		
父親の労働時間	一週間当たり 52.5時間		

は親子関係で最も必要とする発達課題として「特定の人との愛着の構築」を提唱した。それ以後乳児期の親子関係で多くの研究者が愛着に関する研究をしてきた(Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。それらの研究から、親がどのように育児に関わるかで発達の個人差が生じることは明らかにされている。この個人差は、幼児期における仲間との関わりと関係があるという研究も多数ある(Abramovitch & Grusec, 1978; Asher & Hyme, 1981; Hartup, 1983; LaFreniere & Charlesworth, 1983; LaFreniere & Sroufe, 1985; Vaughn & Waters, 1980, 1981)。乳児期とは異なり、幼児期は新しく活動の場として学校システムが加わり生活環境は拡大され、直接友達や学校の先生からの影響も受けるようになる。親からは持続的に影響を受けそれが累積されていく。Bronfenbrennerは、母子コミュニケーションと乳幼児の問題行動との関連を研究している(1998)。母親が2歳児とインタラク션을あまり持たなかった子どもは、4歳時では子どもとインタラク션을多く持った母親の子どもより問題行動の増加が見られ、特に経済的レベルの低い家庭の子どもは経済的レベルの高い家庭の子どもよりも問題行動が多かったことを報告している。この結果からわかるように乳児期の問題行動は成長に伴って累積されることを明らかにしている。このように子どもに対する母親の行動や態度の質的、あるいは量的な違いが子どもの問題行動に影響している。最近の子どもの問題行動の原因を解明するためにも、親や教師や仲間間の関係を明らかにしていくことが必要である。本研究では、マイクロシステムにある母親に焦点を当て、(1) 幼児を持つ母親が子どもへどのような対応をしているか、(2) それらの行動が子どもの社会的発達にとって重要か、又(3) どのような児童観を持っているか

を明らかにすることを目的とする。

## 方法

**被験者:** 釧路市内の幼児を持つ母親を対象にアンケートを求めた。219名(男児103名、女児116名)の母親から回答があった。子どもの年齢は平均で63ヶ月(range 81-39 months)であった。

**手続き:** アンケートは幼稚園を通して子ども又は親に手渡され、一週間後に回収された。家族に関する情報は表2に示す(表2)。この表から家族の人数は比較的多く、中には、8人家族といった大家族となっている。なお、二世帯の場合には、同居とは異なるのでカウントしていない。本研究は大きな研究の一部であり、その質問紙の中で、子どもが遊ぶ近所の人達の安全性についても調査しているので報告する(表3)。

**材料:** アンケートは2種類の質問紙からなっている。親の行動とその重要性に関するアンケートは10項目からなっており、3段階評定で回答するようになっている(親の行動に関しては、0-全然 1-時々 2-たびたび であり、重要性に関しては、0-私の子どもの社会的発達に重要でない 1-私の子どもの社会的発達には重要である 2-私の子どもの社会的発達には非常に重要である)。児童観に関するアンケートは13項目からなり、5段階評定で回答するようになっている(1-全く違う 2-違う 3-わからない 4-その通りである 5-全くその通りである)。

## 結果と考察

まず表3の家庭環境に対する認識について報告する。子どもが遊ぶのに近所の人達は安全かという質問に対し、48%の母親はいくらか安全と答えており、非常に安全と答えた母親は7%と非常に低い数字であった。又安全でないと答えた親は10%であった。最近の事件では、加害者が近所又は知人という事件もいくつかあげられている。母親は子どもが安心して遊べるよう身近な近所の人達とお

表3 近隣の人達に対する安全性

全く安全でない	5%
大変安全ではない	5
いくらか安全	47.9
かなり安全	34.2
非常に安全	7.3

互いに交流し信頼しあうことが必要であろう。そうすれば安心して子どもを外で遊ばせることもできるのである。

表4は子どもの行動に対する親の行動と、その行動の重要度が示してある。3段階評定となっているので各段階別に何人の母親が回答しているかを%で、又全体平均は得点で示した。いくつかの項目を見ると、項目1の回答では、99%の母親は子どもの行動が良かった時にはほめており、ほめることは子どもの社会的行動の発達には重要であると考えていることがわかる。

項目2では、子どもに規則を守らせる場合、大人を手本として教えることは重要と考えており、現実には子どもに大人を見なさいと言っている母親が多い。しかし、中には重要と思いつつも実際には子どもにそのような事を言わない母親もいる(12%)。子どもは母親から大人を見習いなさいと言われて育っていくとしたら、この点で大人は子どもの手本となるようきちんと規則を守る事が必要であろう。現実には大人は規則に関する意識が薄いようである。又、全然そのような行動はしない(評定0)に回答した割合の多い項目は、(3)(4)(7)(8)等が挙げられる。これらは、人の前では謙虚であるようにといった教育をしていることが伺われる。日本人の性格特徴を醸成していると考え

られる。項目7では、友達との喧嘩では、相手に勝ちをゆずるようには言わない親が多い。又多くの母親はそのことは、子どもの社会的行動の発達には重要でないと考えている。これと関連して、項目10では、子どもが友達から傷つけられた場合、母親の多くは、やり返さないようにと言わない傾向にある。子どもが仲間から傷つけられていても何も言わないか、逆にやり返さないと言っているか、あるいは気がつかないといった行動のいずれかを選択しているようである。今後いじめ問題とも関連させて研究していく事が必要と思われる。全体的に見ると親の行動には、あまり重要と思わなければ子どもに何も言わない親が多いように思われる。親の対応行動と重要度との関連を見ると多くの項目で相関が見られた(表5)。同じ項目間でいづれも相関があるところから(項目3は $p<.05$ 、その他の項目はすべて $p<.001$ )、親が子どもに対応する頻度は、子どもの社会性の発達に重要と考えている割合と関係があると言える。

表6は母親の子ども観について項目別に平均得点が示してある。主成分因子分析を行ったところ、4因子が抽出された。寄与率は54.1%であった。第一因子は4項目抽出され、「育児観」としてまとめられる。この因子は全体

表4 子どもの社会的行動に対する親の行動と重要度

N=219

項 目	親の行動				重要度			
	0	1	2	平均	0	1	2	平均
1. 子どもの行動が特に良かった時、家族や友達の前で子どもをほめる	1	46	53	1.5	1	46	53	1.5
2. 子どもに大人がどのように規則を守っているか、よく見るように促している	12	71	17	1.1	3	63	33	1.3
3. 他の人のいるところで、子どもが自分の考えを表現しないようにさせている	85	13	1	.2	41	38	18	.8
4. 友達や大人からのお世辞や褒め言葉を誇らしげに言わないようにさせている	46	37	14	.7	40	49	6	.6
5. 年寄りの人達の前では、年寄りを尊敬し、行儀正しく、静かにするように言っている	11	51	37	1.3	5	57	36	1.3
6. 子どもが自分の能力について自信過剰にならないように言っている	37	44	16	.8	23	58	16	.9
7. 自分の子どもが友達と喧嘩をしている時、友達に勝ちをゆずるよう勸めている	63	30	5	.4	40	49	6	.6
8. 子どもが、他の人の注目を得るために、自分のスキル(技)や知識を見せびらかせないように言っている	51	35	12	.6	38	48	10	.7
9. 子どもが正しい答えを知っている時には、先生や大人の質問に積極的に答えるように励ましている	9	39	49	1.4	5	54	40	1.4
10. 他の子ども達から傷つけられた時でも、やり返さないように子どもに言っている	32	44	22	.9	14	55	29	1.2

\* 0~2の欄の数字は%、0 全然 1-時々 2-度々(この様な行動をする)  
平均欄の数字は得点を示す

表 5 母親行動と重要度との関係

N=219

母親の行動	行動の重要度									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	.33***	.18**	.001	-.26***	-.001	-.09	-.016	-.06	.10	.03
2	.11	.48***	-.002	.02	.02	.07	.02	.11	.04	.15*
3	-.03	.02	.16*	.11	.11	.16*	.02	.15*	-.00	.07
4	-.08	-.04	.21***	.39***	.16*	.23***	.03	.22***	-.13*	.11
5	.10	.12	.10	.17**	.61***	.21***	.13*	.30***	.19**	.15*
6	-.08	-.05	.17**	.23***	.17**	.60***	.15*	.32***	-.05	.12*
7	.02	.02	.04	.12*	.13*	.10	.36***	.08	.02	.04
8	-.04	.01	.14*	.29***	.19**	.30***	.17**	.61***	.08	.23***
9	.05	.10	.02	.01	.07	-.05	.03	.07	.51***	.001
10	.04	.05	.09	.15*	.18**	.09	.13*	.31***	-.03	.39***

1 ~ 10 の数字は項目番号を示す \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* P<.001

的に得点は低く、育児観に関してはあまり意識していないようである。第二因子は5項目抽出され、「教育・しつけ方略」としてまとめられる。日常生活の中で、実際母親が子どもをどう教育すべきかといった考え方に

関する因子である。この因子は比較的得点が高いところから、母親は教育方法やしつけ方法には関心が高いと考えられる。第三因子は3項目抽出され、「家庭での接し方」にまとめられる。比較的得点が高く、母親は家庭で子どもをどう扱うか

表 6 親の児童観

N=219

項	日	平均得点 (SD)
第一因子 育児観		
11. 母親は、子どもの教育のためなら何でもし、犠牲になるべきである		1.9 (.8)
8. 母親は、特に学校で子どもがうまくいくよう援助することが一番の愛情表現である		2.5 (.9)
9. 母親の関心事は、ただ子どもの世話をすることである		1.7 (.6)
6. 子どもがどのように振る舞えばよいかを学ぶ最も良い方法は、大人の周りにいることである		2.1 (.7)
第二因子 教育・しつけ方略		
4. 母親は、子どもが一生懸命努力するよう訓練し、又、しつけにおいても訓練しなければならない		3.6 (1.0)
2. 親は、子どもがトレーニングできる年齢に達したら、すぐトレーニングをはじめなければならない		2.9 (1.0)
3. 子どもは、何事も一生懸命すれば、進歩することができる		4.2 (.8)
7. 子どもがずっとあなたに従わないでいるなら、当然罰としておしりをぶつべきである		2.4 (1.1)
5. 他の人の良い行動を例にあげながら、子どもに教えるべきである		3.2 (1.0)
第三因子 家庭での接し方		
12. 子どもは母親と一緒に寝ることが許されるべきである		3.3 (1.0)
13. 子どもは、母親と一緒にいて、お使いをしたり、集会について行ったりすることが許されるべきである		3.2 (.9)
10. 子どもは、母親や家族の庇護のもとに置くべきである		2.9 (1.1)
第四因子 人間観		
1. 子どもは生まれつき善人である		3.7 (1.2)

表7 母親の児童観と重要度との関係

N=219

母親の 児童観	行動の重要度									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	.07	-.002	-.08	-.12*	-.08	-.06	.06	-.06	.14*	-.08
2	-.11	-.04	.03	.14*	-.09	.14*	.04	.18**	.002	-.07
3	.08	-.03	-.01	-.10	.04	-.004	.12*	.01	.17**	.05
4	.04	.11	-.02	.10	.07	.14*	.06	.20**	-.24***	-.02
5	.04	.02	.01	.02	.07	.13*	.08	.14*	-.01*	-.05
6	-.05	.03	-.01	.07	.02	.06	.08	.13*	.16**	-.07
7	-.10	-.01	.06	.12*	.07	.14*	.16*	.14*	.14*	.02
8	-.07	.01	.12*	.12*	.11	.26***	.15*	.17**	.17**	.13*
9	-.13*	-.01	.01	.09	-.08	.08	.11	.11	.03	-.01
10	.04	-.01	-.03	-.03	.03	-.02	.03	-.07	.14*	-.09
11	-.05	-.06	-.00	-.03	-.01	.01	.13*	.04	-.01	-.02
12	-.07	-.00	-.11	-.04	-.07	-.09	-.16*	-.07	.10	-.16**
13	-.003	.07	-.18**	-.10	-.06	-.09	-.02	-.15*	.14*	-.15*

1 ~ 10 の数字は項目番号を示す

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01 \*\*\* P&lt;.001

という事に関しても関心が高いようである。第四因子は1項目で構成されており得点も高い。人は皆生まれつき普人であるという「人間観」を持っていることがわかる。次に項目別に見ると、得点が最も高いのは、第二因子の項目3で母親は何事も一生懸命すれば進歩することができると考えているようである。次に高い得点は、第四因子の項目1である。次で高いのは第二因子の項目4が多い。母親は子どものしつけは早い時期に訓練すべきだと考えている。早期教育という言葉があるが、教育者である親は、他人ではなく紛れもなく親であることを忘れてはならない。得点が最も低い項目は、第一因子の項目9、10である。母親は日常生活において育児だけでは満足していないようで、育児より他の事に関心があることを示している。育児以外の興味を持つことは必要であるが育児とのバランスをとることが必要である。

児童観と先に述べた母親行動の重要度との関連性を見ると(表7)、児童観の項目8(育児観因子)は、重要度の(1)(2)(5)を除く項目と正の相関が認められ、母親の育児に対する信条は子どものコミュニケーションの仕方にも関係しているようである。又、児童観の項目(12)又は(13)(家庭での接し方因子)と重要度の項目(3)(7)(8)(10)と負の相関を示し、日常生活の中で外出する時に一緒に連れていくべきだ

と考えている母親は、規則を守る事や、子どもが他の仲間と喧嘩したり、仲間から傷つけられた時には、あまりうるさく言わないことが子どもの社会的発達に重要だと思っている。あまりうるさく言わないという事は、子どもに対して無関心、放任にもつながる危険性がある。これらの関係を発達的に見ていくことは今後の課題であろう。児童観の項目(4)(2)(教育・しつけ方略因子)は重要度の項目(6)(8)と正の相関が認められる。子どもは何事にも一生懸命努力するようにトレーニングすべきだと考えている母親は、人前では自信過剰にならず、能力は見せびらかすことをしないように言うことは、子どもの社会的発達にとって重要だと考えている。このように子どもとはどのような子どもであるべきかという母親の信条は、子どもの社会的発達にとってどのような行動が重要であるかということとは密接な関係を持っている事が明らかとなった。

本研究は幼児期の環境教育者としての母親の行動と児童観について明らかにした。子どもの行動に影響する母親の子ども観は行動へ反映される。幼児は学童期や青年期の子どもよりは母親と一緒にいる時間が長い。毎日の生活の中で母親は子どもの行動や感情についてもう少し敏感になるべきであり、子どもに言葉でどう感じたのか、どう考えているのか表現させ、それに対して親も自分の考えや感じていることをたとえ相手が幼児と言えどもきちんと伝

えるべきである。幼児期よりそのような対応の仕方を継続していくべきであり、そのような母子のコミュニケーションの繰り返しが子どもの思考能力や判断能力を育てていくといえよう。そうすれば環境教育なるものも子どもの成長と共に学習されていくのである。それは又箕浦が言っている幼児期から地球市民（箕浦, 1997）として環境と人間の共生を教育することなのである。

### 引用文献

- Abramovitch, R., & Grusec, J. (1978) Peer imitation in a natural setting. *Child Development*, 49, 60-65.
- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associate.
- Bowlby, J. (1969) *Attachment and loss*. Vol. 1, *Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他(訳), 1976, 「母子関係の理論(特) 愛着行動」岩崎学術出版社.)
- Bronfenbruner, U. (1979) *The ecology of human development*. Cambridge: Harvard University Press.
- Bronfenbruner, U. (1998) The ecology of developmental processes. In R.M. Lerner (ed.) *Handbook of Child Psychology* (5th edition). Wiley: New York. pp.993-1028.
- Fogel, A. (1991) *Infancy* (Second edition). New York: West Publishing Company.
- LaFreniere, P.J. & Charlesworth, W.R. (1983) Dominance, attention and affiliation in a preschool group: A nine-month longitudinal study. *Thology and Sociobiology*, 4, 55-67.
- LaFreniere, P.J. & Srlufe, A.L. (1985) Profiles of peer competence in the preschool: Interrelations between measures, influence of social ecology, and relation to attachment history. *Developmental Psychology*, 21, 45-69.
- 箕浦康子 (1997) 地球市民を育てる教育. 岩波書店.
- 落合良行・伊藤裕子・斉藤誠一 (1994) 青年の心理学, (株)有斐閣.

付記：本研究は平成8～9年度科学研究補助金（基盤研究C，課題番号0861010，研究番号70271715）の補助によって行われた。この研究に参加してくださいました9の幼稚園の諸先生とお母様方に感謝いたします。